教育

解答乱麻

新首相に望む決断

品川女子学院校長　漆紫穂子

うるし・しほこ　東京都内の私立校教諭を経て品川女子学院で学校改革に着手。社会で活躍する女性の育成を目指す。昨年4月から現職。文科省新システム開発プログラム委員。

生徒に聞かれた。

「先生、新聞で読みました。総合学習って減るんですよね。ゆとり教育の見直しどう思われますか。趣旨は悪くないけど、やることが決まっていなかったんですよね。小学校の時、土曜は休みになるだけで、総合学習も中身がバラバラでした。私たち『ゆとり世代』なんて言われているんですよね」

最後の言葉は胸に刺さった。自分にも同じ経験があるからだ。私の母校はかつての都立名門校、今は進学重点校で私は「学校群世代」である。

教育行政が180度方針変更を繰り返し、子供たちを振り回す根本問題は何なのか。

「責任者の不在」である。トップであるはずの大臣はいつ交代するか分からない。諮問機関の中教審委員の任期は2年。現場責任者の課長クラスは頻繁に異動する。ゆとり教育の推進者とされた人物も消えた。わが国の教育行政はいわば「経営者のいない会社」になってしまっているのだ。

そこに「首相辞任」である。新首相は教育改革のスピードを緩めず、まず「人」の仕組みを見直してほしい。

その上で必要なものを、私学で長年、学校改革に携わってきた経験から4つあげる。

第1に「長期ビジョン」である。未来の日本の理想像を描き、それを支える人材の育成という視座で考えたい。現状のように容易に変更される「お題目」にならぬよう、策定の過程から現場と十分な情報共有を行い、すべてをこの軸に照らして判断する。

第2に「現状把握」である。総合学習の失敗要因は、現場のいわゆるヒト、モノ、カネの状況把握不足にある。杉並区立和田中のような成功事例があり、本校でも総合は他教科の対立項でなく、動機付け的役割を果たしている。理念の間違いではなかった。

現場に下り、問題点を確認し具体的改革項目を立てる。

第3に「優先順位」である。大学入試を改革する前に、小・中・高のカリキュラムをいじっても現場は動かない。民間人校長が成功事例を示しても、予算と人事を校長に渡し、評価と絡める仕組みを作らなければ普及しない。

現場の目には優先順位が明確なのに、文科省で話題に出すと「既得権が」「隣の課とかぶる提案は」と返ってくる。子供の1年は戻ってこない。改革はスピードを要する。優先順位の見極めが不可欠だ。

第4に「指標」である。ゆとり見直しの背景にはPISAやTIMSSなど国際調査の結果があるというが、それはわが国の目指す「学力」の指標となるものだったのか。長期ビジョンに向け、短期的成果を測る物差しは、あらかじめ定めておかねばならない。

教育改革は真の成果を出すまでに時間を要する。どんな改革案にもメリットデメリットはあり、すべての人に支持されることはない。目標を定めたならば、いかなる批判にも耐え、根気強く説明し、軸をぶらさず最後までやりきる責任者の存在が不可欠だ。

「人事は急に変えられない」というのであれば、より教育現場に近い場所へ権限委譲することである。教育改革は待ったなし、新首相には速やかな決断をお願いしたい。

毎週水曜日掲載